

反核医師のつどい20周年

核廃絶へ力をあわせ新たな前進を

核戦争に反対する医師の会

反核医師の会

ニュース

第37号

2007年11月30日

核戦争に反対する医師の会事務局
〒105-8565 東京都港区芝浦3-1-1
新百合会館 5F 反核医師の会事務局
電話 03-3542-1111 FAX 03-3542-1112
e-mail: ipppnw@nucnet.or.jp
http://www.nucnet.or.jp

全国から335人が参加

被爆国医師として社会的責任を果たそう。「第18回核戦争に反対し核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい」が9月23日、24日に京都市の立命館大学、京都産業会館シルクホールで開催された。

核兵器使用は不可能

ティルマン・ラフ氏が記念講演



記念講演をおこなったティルマン・ラフ氏

1日目、IPPNW(核戦争防止国際医師会議)オーストラリア代表のティルマン・ラフ氏が「核はなくせる I can, You can」をテーマに記念講演した。ラフ氏は、世界中の核兵器の千分の1を使用するだけで食料難や気候変動など地球上に異変が起きると指摘し、「どんな



2日間で過去最高に迫る335人が参加し核廃絶への決意を固めあった

軍事目的をもってしても核兵器使用は不可能だ」と強調。対人地雷禁止条約など過去のNPO運動の成果にもふれながら、「核廃絶のために、われわれ世界中の仲間が協力することが大切」として、ラフ氏が中心になって進めているICANN(International Campaign to Abolish Nuclear Weapons to Abolish Nuclear Weapons Campaign)への参加を呼びかけた。



片岡勝子氏

9月23、24両日京都で開催の第18回つどいは質・量ともに大成功でした。ご支援、ご協力をお願いした参加者、関係者に深く感謝いたします。

2つの講演「JPPNWの活動」片岡勝子JPPNW(核戦争防止国際医師会議日本支部)事務総長、「核はなくせる I can, You can, We all can」ティルマン・ラフ氏

第18回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどいのお礼

実行委員長 山上 紘志

立場から核心のつく問題を指摘し、その解決の具体的な提案をおこないました。そのテーマを執拗に掘り下げ、相互によく噛み合った論議を展開することができました。コメントの片

ことは特筆できます。つどい20周年にふさわしい企画と史上2番目の参加者で、メインテーマ「NO核兵器、LOVE平和憲法」20周年に新たな決意IN京都」を参加者全員で共有できた

ことを報告します。つどい終了後もラフ氏の講演が各地で開催されました。そこでは、医療用放射性同位元素の製造に使われる高濃縮ウランが核兵器に転用できる報告があり、衝撃を受けました。スウェーデンに収まる小型核兵器が製造されている事実とあわせて、医療関係者にその危険性を喚起する必要性を感じました。



片岡 勝子氏

記念講演に先立ち、JPPNW(核戦争防止国際医師会議日本支部)事務総長片岡勝子氏が特別講演

非核保有国を増やそう

JPPNW事務総長片岡勝子氏が特別講演

の片岡勝子氏が「JPPNWの活動」と題して特別講演をおこなった。南半球が非核地帯になっているなかでの「北アジア」の役割を強調。日本の非核三原則、朝鮮半島非核化宣言に続いて、モンゴルの非核兵器地帯宣言の意義を指摘し、「核兵器に依存しない非核保有国を増やそう」と訴えた。【2面つづく】



初日・開会前におこなわれた平和ミュージアム見学(上)夜のレセプション(下)

- 第18回つどいへの祝電・メッセージ
- ◇元IPPNW共同代表 メアリー・アシユフォード
 - ◇広島市長・秋葉忠利
 - ◇長崎市長・田上富久
 - ◇広島平和研究所所長 浅井基文
 - ◇参議院議員 小池 晃(日本共産党)
 - ◇日本原水爆被害者団体協議会
 - ◇原水爆禁止日本協議会
 - ◇核戦争防止・核兵器廃絶を訴える京都医師の会(反核京都医師の会) 代表世話人 IPPNW京都府支部長 浜 広信
- (順不同、敬称略)

20周年を迎えた

私たちの取り組みと課題

全体会

【一面つづき】

記念講演に先立って開催された全体会では、「20周年を迎えた私たちの取り組みと課題」と題して、基調報告と特別報告、各地の活動報告がおこなわれた。

び、IPPNW元会長のアシュフォード氏からのメッセージが紹介された。

核廃絶へ創造的 とりのくみを

全体会の冒頭、山上絃志実行委員長の開会挨拶のあと、広島、長崎両市長、原水爆禁止日本協議会、原水爆被害者団体協議会および

反核医師の会の原和人常任世話人が基調報告をおこないました。基調報告では、核兵器と平和をめぐる情勢を報告し、核兵器の廃絶にむけて、北東アジアの非核



全体会で報告をおこなう児島徹代表世話人(上)と原和人常任世話人

地帯の実現や「ICAN」などの運動、原爆症認定集団訴訟、被爆者医療などのとりのくみの重要性を強調。唯一の被爆国の医療の専門家として、被爆の実相を伝えたり、被爆者の支援や、核兵器の廃絶をめざさざるをえない創造的な取組を行なおうと訴えた。最後に、「申し合わせ事項」にもとづき、3年を経過した「反核医師の会」の活動を紹介。

「米国は新たな核戦略の拠点に日本を組み入れ用いている。私たちは、2010年の核不拡散防止条約

(NPT) 再検討会議に向けて、国民の間に運動を広げよう」と呼びかけた。

20年の軌跡

続いて、児島徹代表世話人が「20年の活動の軌跡」と題して、特にこの10年間

各地の活動報告

初日の全体会では、5人の医師が各地の活動を報告した。

●京都

反核京都医師の会世話人の川合一良医師は、日本で初めてノーベル平和賞を受賞した湯川秀樹が核兵器廃絶運動に果たした業績にふれながら、京都での反核運動について紹介。湯川秀樹の日本国憲法への強い思いと「核は絶対悪であり、人



川合一良氏

類とは共存できない」という決意はわれわれへの大きな遺産であると報告した。

●奈良

奈良県の坪井裕志医師は、9月に「奈良反核医師の会」が全国で29番目の結成をしたことを報告した。



坪井裕志氏

とんど却下するなど、反響に出ている」と現状報告をおこなった。

●沖縄

同じく全国の常任世話人の沖繩・武居洋医師は、6月に開催されたIPPNW北アジア地域会議に参加した報告をおこなった。



武居 洋氏

●京都

京都府民連中央病院の村上純一医師は、昨年6月にカナダ・バンクーバーで開かれた「世界平和フォーラム」に参加した経験を各地で講演した活動を紹介。村上医師は「仕事に埋もれがちになるが、講演活動が平和を考えるいい機会になっている。若手医師にもっと平和を学ぶ機会を与えてほしい」と訴えた。



村上純一氏

核戦争に反対する医師の会20周年記念大会へのメッセージ

親愛なるみなさま

核戦争に反対する医師の会が20周年記念を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。過去20年にわたり、会のたくさんの方々とは知り合いになれ、ともに活動できたことは、私にとりまして、ずっと名誉であり、喜びでありました。また、私が日本を訪れたときには、みなさまには心温まるおもてなしをしていただき、その楽しい思い出がいっぱいです。



今年、私の著書「もう血は流さないでー暴力・テロ・戦争を解決する101の方法」を日本語に翻訳していただけることになり、非常に楽しみにしています。ご存知かもしれませんが、この本は今年ニューヨークで独立出版社賞を受賞しました。フリーダム・ファイター部門で銅賞を頂きました。「The US Constitution Illustrated (絵で見る米国憲法)」が金賞でした。

下訳はほぼ完成しているとお聞きし嬉しく思っています。また、本の一部に日本での例を加筆されるとのことですが、それも楽しみです。日本の読者や活動家にとっては、より役に立つ、興味あるものになることでしょう。

本の中で、日本国憲法第9条の例も取り上げています。それは、永久に戦争を放棄するという日本の約束は、世界の他の国が目指すべき、輝ける光だからです。もし日本が第9条を撤回し、地球を破壊する恐れのある軍事競争に仲間入りするようなことがあれば大変な悲劇です。

この20年、反核医師の会は核廃絶のために精力的に活動されてきました。IPPNWにも積極的に協力していただき、世界大会への参加、反核医師の会の「つどい」や出版を通して大変寄与していただけてきました。

今年、IPPNWは胸躍るような新しいグローバル・キャンペーン、ICAN (International Campaign Against Nuclear Arms 核兵器反対国際キャンペーン) を開始しました。このキャンペーンは注目され、さまざまな国とDr. ハンス・ブリックスやロメオ・ダレール将軍(カナダ)を始めとする国連高官などの支持を得ています。みなさま方がICAN運動で活動される様子を耳にするのを楽しみに待っています。

ご存知のように、2003年にイラク爆撃を中止させようと数百万人が行進したとき、ニューヨーク・タイムズは「いまだ世界で二番目の超大国ー世界の世論ーは健在だ」と書きました。私たちは、いっしょになって流れを変えつつあるのだと確かな息吹を感じることが出来ます。

みなさま一人一人に、20周年と未来のために心からの祝福の言葉を贈ります。

メアリー・ウイン・アッシュフォード (事務局 訳)

東アジアの非核化めざし議論

市民公開シンポジウム



2日目の市民公開シンポジウム「東アジアの非核、安全保障と日本国憲法」では、4人のパネリストが報告。「冷戦はアジアでは終わっておらず、冷戦の克服はアジア全体の課題」などトピックスが議論された。

藤岡惇立命館大学教授は、宇宙の軍事利用と先制攻撃戦略、MD(ミサイル防衛)構想をすすめるアメリカと、それに追随する日本を批判。富田宏治閣下は「東アジアの支配体制の変化が日本の孤立を生んでいる」と指摘し、朝鮮半島と日本の友好関係の構築を訴えた。また、すべての核保有国に、直ちに核兵器廃絶に向かうことなどを求めたアピールを確認し閉会した。

来年の「第19回つどい」は、11月22日、23日に、石川県金沢市で開催される予定。

原爆症認定制度の抜本改正を 求める緊急100万人署名に ご協力を

2007年8月、当時の安倍総理大臣は被爆者代表と会い原爆症認定制度のあり方を見直すことを言明、厚生労働大臣に指示しました。厚生労働省は専門家による検討機関を設け、大臣は年内に結論を出したいと述べています。しかし、この結論が被爆の実態と被爆者の実情に即した被爆者救済の認定制度となるかどうかは、今後の運動にかかっています。

日本原水爆被害者団体協議会、原爆症認定集団訴訟全国原告団、原爆症認定集団訴訟弁護団全国連絡会、原爆症認定集団訴訟を支援する全国ネットワークの4団体は、原爆症認定基準が、一日も早く原爆被害の実態に見合ったものに改められるよう、総理大臣・厚生労働大臣への働きかけを強めるために年内100万人緊急署名にとりくんでいます。

4団体は、短期間のとりくみでもあり、広く国民の皆さんの協力を呼びかけています。ぜひご協力ください。



署名用紙は下記よりダウンロードできます。

(http://www.ne.jp/asahi/hidankyo/nihon/rn_page/gazou/pdf/0710shomei.pdf)



9月23日の立命館大学。I CANのティルマン・ラフ代表の記念講演がありました。第18回核戦争に反対し核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどいに参加した我々の心にはその訴えが今でも響いています。ラフ氏が講演される中、私は気が気ではありませんでした。その後控えている「ラフ氏を囲む会」の担当を任されていたから

30人を超える若手医師・医学生が「ラフ氏を囲む会」で

活発に討論

す。とにかく若手医師と医学生に参加を呼びかけ、集まったメンバーを見てから臨機応変に進行方法を考えようと決まっていたからです。私は参加者が全く集まらず、場がしらけるのではないかと心配していました。最悪の時は、自分だけでもラフ氏とお話できなくてはと思い、記念講演は集中して聴きました。「医師として父親として」、「核兵器使用による地球への影響」、「軍事費削減による経済効果」、「核兵器はどんどん削減されているがまだ2万発」、「小型化しており、テロリストのケースに入る」、「一組織では核廃絶はできない、みんなで連携を」など、ポイ



参加者と交流するラフ氏

ントとなる言葉を中心に繰り返して、いくつでも質問できるように準備しました。ところがそんな心配は全く不要、「ラフ氏を囲む会」の会場は若い力で一杯でした。そう、今回のつどいに



最後は参加者が輪になって大合唱

は若手医師が多く、しかも医学生が30人以上参加していたのです。そして学生さんのほとんどが「ラフ氏と囲む会」に参加してくれました。みんな問題意識をしっかりとっていました。集まる人数も予想外なら、活発な学生さんばかりというとは嬉しい誤算でした。大丈夫。競って質問しあい、みんな真剣に討論していました。最後は「ヒロシマの

ある国で」の合唱が始まり、そして何とか上手くまとまって終わりました。その後学生支部が結成されたとか。彼らの活動を頼もしく思い、これから戦争を全く知らない子ども達に反核を伝えていける力強い仲間がたくさんいることに安心した1日でした。(医療法人平和会吉田病院 高木美昭)



ティルマン・ラフさんは、9月22日に和歌山で「オーストラリアでの英国の核実験とポリネシアでのフランスの核実験の影響」について講演。翌日には今回のメインである「つどい」で「核は廃絶できろ I can, You can We all can」のタイトルで核廃絶運動の現状と今後 I P P N W など N G O が取り組んでいく世界的なキャンペーン I C A N について講演、懇親会の後には医学生・若手医師と深夜まで懇談。その後、ウラン採掘に関する講演(大阪)、懇談会(京都)、29日には東京で、I C A N についての講演など我々反核医師の会や、各地の「医師の会」等のために実に精力的に動かれた。しかも、その間に新聞などのインタビューがあり、広島、神奈川、大阪、東京で別の講演をし、秋葉市長訪問もしている。30日以降も何カ所かで講演し、外務省も訪問、その後 I P P N W の会合参加のためロンドンへと旅立った。ほとんど観光することもなく、時間がある限り質問に答え、講演内容のすり合わせでプレゼンテーション

ティルマン・ラフさんから学んだこと

松井 和夫 (常任世話人)

ラフさんにとって今回の行事の中で最も印象的であったのは医学生・若手医師との懇談だったことである。実際、彼は何度も学生たちの熱意を賞賛していた。彼らが熱意を持ち続けてくれることを願う。また、ほぼ

一方の講演だけでなく討論など双方の企画がもっとあって良いのではと思う。ラフさんが代表を務める M A P W はオーストラリア政府や駐豪各国大使と積極的に懇談し、平和運動のキーパーソンと密接に協同し、マスコミにも頻りに登場し活動している。しかし、M A P W が決して多くの会員や潤沢な予算を持っていないわけではない。彼らの卓越した行動力を見習いたいものである。彼の連日の講演から、I C A N がかなり広範に受け入れられてきていること、核兵器廃絶条約が、かなりの政府レベルで支持されてきていることなどはもとより、医療用アイソトープに兵器転用可能な高濃縮ウランが使用されていること、ウラン採掘で環境汚染が想像以上に進んでいることなど、たくさん学ばせてくれた。今、我々にとって大切なことは今後具体的に何をやるかである。できることは、たくさんありそうだ。

ラフさんが代表を務める M A P W はオーストラリア政府や駐豪各国大使と積極的に懇談し、平和運動のキーパーソンと密接に協同し、マスコミにも頻りに登場し活動している。しかし、M A P W が決して多くの会員や潤沢な予算を持っていないわけではない。彼らの卓越した行動力を見習いたいものである。彼の連日の講演から、I C A N がかなり広範に受け入れられてきていること、核兵器廃絶条約が、かなりの政府レベルで支持されてきていることなどはもとより、医療用アイソトープに兵器転用可能な高濃縮ウランが使用されていること、ウラン採掘で環境汚染が想像以上に進んでいることなど、たくさん学ばせてくれた。今、我々にとって大切なことは今後具体的に何をやるかである。できることは、たくさんありそうだ。

一方の講演だけでなく討論など双方の企画がもっとあって良いのではと思う。ラフさんが代表を務める M A P W はオーストラリア政府や駐豪各国大使と積極的に懇談し、平和運動のキーパーソンと密接に協同し、マスコミにも頻りに登場し活動している。しかし、M A P W が決して多くの会員や潤沢な予算を持っていないわけではない。彼らの卓越した行動力を見習いたいものである。彼の連日の講演から、I C A N がかなり広範に受け入れられてきていること、核兵器廃絶条約が、かなりの政府レベルで支持されてきていることなどはもとより、医療用アイソトープに兵器転用可能な高濃縮ウランが使用されていること、ウラン採掘で環境汚染が想像以上に進んでいることなど、たくさん学ばせてくれた。今、我々にとって大切なことは今後具体的に何をやるかである。できることは、たくさんありそうだ。

「I CAN」に賛同を！ 以下のアドレスから「I CAN」への賛同を意思表示ができます。個人、地域、団体に賛同を広げましょう。(http://www.ican.org)

各地の反核医師の会から

奈良反核医師の会を結成

全国で29番目

坪井裕志

戦争負担がいよいよ現実味を帯びた昨今の情勢に対する危機感、そして、昨年には、高齢化とはいえ、奈良被団協の解散があり、医師として何かをしなければと切実に思う時に、同じ考えの仲間と奈良県での反核医師の会結成の話題になりました。

丁度その頃、第18回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどいが近畿で開催されると知り、会員資格で実行委員に加えて戴きました。その結果、奈良県保険医協会は、私ともう一人を反核平和委員に任命しました。つどい第1回実行委員会の会議で、各地の活動報告を聞くにつけ、結成の思いが明確になり、その場でご支援をお願いしました。

有志数人と結成のための第1回準備会を今年の3月に行い、以後月に1回会合を持ち、結成までに計7回開催しました。5月には、全国反核医師の会代表世話人の児嶋徹先生をお招きして勉強会を持ちました。結成総会を8月の敗戦記念日頃にと取り組んでいる中で、毎日新聞社から奈良版



の「ドクターからの手紙」というシリーズへの投稿依頼がありました。これは同社と奈良協会との関わりからでした。奈良反核医師の会結成を準備している気持ちを投稿しますと、奈良支局長が関心を示して、別取材申し込みがあり、まわりの状況が結成に向けて着実に動き出しました。このような運動に、とかく警戒心をもたれる方もありますので、結成に向けて、いわゆる旗を振るのではなく、各人が反核平和に関心を示し、やれる範囲で、その思いを発信する事から始めようと呼びかけました。また、新聞掲載を読んだ患者さんなどから、応援の声も戴いたのは望外の嬉しいことでした。

9月2日の結成総会では、つどい実行委員会の積極的な支援の元に、成功裏に開催できました。会議と2つの講演を企画し、一つは、元奈良被団協会長の市原大資氏に、もう一つは原爆症認定集団訴訟に関わっておられる兵庫県の郷地秀夫先生にお話ししました。参加者は34名で、



34名が参加した「核戦争を防止し、核兵器の廃絶を求める奈良県医師の会」の結成総会

毎日新聞社と共同通信社の記者が取材に来られ、翌日に取材記事が各新聞に掲載されました。現在、会員数は41名です。尚、当会への連絡先は、種々の理由から、私の医院になっていきますので、会員の不便さを感じて、今後は、会員を増やし、会の維持・発展に努めたいと、世話人一同頑張る所存です。

第18回 IPPNW世界大会

2008年3月9日～11日 インド・デリーで開催

来年3月9日日から11日までの日程で、インド・デリーにおいて、第18回IPPNW世界大会が開催されます。今回も核戦争に反対する医師の会からの代表団を派遣します。ご参加希望の方は、下記までお問い合わせ、お申し込みいただきますようお願いいたします。

(なお、現時点の大会の詳細については、IPPNWの公式ホームページをご参照ください。http://www.ippnw2008.org)

- ◇メインテーマ：「Peace, Health, Development」(平和、健康そして開発)。
- ◇会 期：2008年3月9日(日)～11日(火)
- ◇行程予定：2008年3月8日(土)午後・成田発～3月12日(水)午前 成田着
- ◇費用：25万から30万の予定 (航空運賃代、現地3泊3朝食分。登録費用など別)。(費用はあくまでも予定ですので、ご了承ください)

◇第1次申し込み締切 2008年1月31日

◇申し込み・お問い合わせ

(株)国際ツーリストビューロー

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通4-7-1 TEL 078-391-2961 FAX 078-332-0977(担当: 榎本)

反核医師の会事務局 151-0053東京都渋谷区代々木2-5-5 新宿農協会館6F

全国保険医団体連合会内 代表 03-3375-5121 FAX 03-3375-1885

panw@doc-net.or.jp

書評

「ヒバクシャの心の傷を追って」中澤正夫著

渡植貞一郎

東京反核医師の会
ウェブサイトにディレクター

ヒロシマ、ナガサキから60年以上になる。この間、何が、核兵器の使用を抑止してきたのか？核戦争による人類絶滅の可能性があったのだから、この質問は、われわれが生存しえた根源を問うのに等しい。敵側の核を互いに怖れたという相互抑止論がある。しかし、核による報復の可能性がない相手でも、核保有国はその使用をためらったのだから、この議論には根拠がない。

被爆実相を知らされた世界の人々が、人道主義的圧力を強め、核の使用を阻止したと考えるのが、論理的である。その世界状況は、「三たび許すまじ」活動が基礎になって形成された。ヒバクシャが、思い出すのもつらい被爆体験を、勇気をもって、語ってくれたおかげだと、私は考えていた。

ヒバクシャの心情はそんな生易しいものではなく、彼ら自身が、実相を語りつくせないことに、深く傷ついている事実を、本書は初めて精神科学的に提示した。私がかつとも深刻に受け止めたのは、記憶欠損である。

「(被爆後に)とった行動、遭遇したできごと、見たことにより、さまざまな程度や形の記憶傷害がおきるのである」「被爆体験とは、証言できるもの、見て記憶したものだけではない(40頁)」「記憶が記憶として意識されないでいる状態(42頁)」という中澤の分析は、衝撃的である。

被爆体験の記憶を他に伝えるのは、基本的には言語による。したがって、記憶欠損とみられる現象には、体験を言語化するものが不可能だった場合もあるにちがいない。

そもそも、言語には歴史的に共有された体験(文化)が埋めこまれていて、言葉によるコミュニケーションが可能なのは、人類共通の体験が、概念として、カテゴリーとして、言語化されているからである。級友や運動部の仲間、戦友同士の間で、深い相互理解が可能なのは、体験共有が、共感の基礎になることの証拠である。

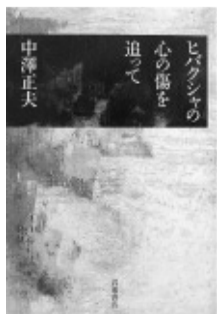
ヒロシマ、ナガサキは、人類の最初で最後の体験であった。人類一般に共通体験がないのだから、本来、言語化しようがなかった。ヒバクシャで認められた記憶欠損は、その冷徹な事実の反映である。被爆体験を言葉にして相手に伝えるには、ヒロシマ、ナガサキ以前の概念にたよるほかはない。それでは、被爆の真のありさまは伝えられない。

しかし、それを語らなければ、あまりにも不条理に、目の前で命を奪われた人々の鎮魂はできない。ヒバクシャは、もともと言葉にできない記憶を語ろうとし、心に傷を負った。中澤は、精神科医と患者との関係を超えた診療活動を通じて、これらを「史上最悪のPTSD」と診断した。過去の戦争災害体験を下敷

きにしたシミュレーションであっても、ヒロシマ、ナガサキを知った世界のほとんどの人々は、核の使用を許すべきでないかと判定した。その圧力が、核の発射ボタンに伸びようとする手を抑えた。その力をもつてすれば、核を放棄させることもできそうなものだが、見通しは明るくない。何故だろうか？

それは、核兵器は通常兵器と本質的に異なるという合意が、まだ世界中の人々の間で確立していないからにちがいない。被爆の実相を、通常兵器による戦災の拡張シミュレーションで理解しているかぎり、「原子爆弾」は「兵器」ではないと、納得するのは難しいだろう。しかし、この事情を克服しなければ、人類は永久に核の脅威から逃れられない。

「被爆体験を重ねないでも」被爆の本質を人類共通の概念にする方策を考え出さなければ、21世紀に明るい未来はない。この書物は、その覚悟をせまる業績である。一刻も早い外国語への翻訳が望まれる。



岩波書店 2007年
■体裁=四六判・上製・カバー・206頁
■定価 2100円 (本体 2000円 + 税5%)

二十一世紀論へ強烈なインパクト